



「同窓会」随想

「母校」卒業生の集いは？

同窓会長 第8回卒業生 小林昌二

「母国」や「母港」が母なる大地に発しますが、「母校」もまた人の子が母に育まれる揺籃ゆりかごのように伝わります。また「十有五にして学に志す」とある論語は、自らの未来に決意をもって舵を取る立志年齢（数え年）を示し、中学生年齢の意義を端的に伝えているようです。

私の場合、中学卒業間際の、一九五八年三月はじめのある日、当時東京は神田の卸商に就職が決まっていた同級の仲良しから「おまえ、将来何になりたいのか」と問われて、そこまで考えていなかった稚拙を恥ずかしく思ったことが忘れられません。

さて現在は「学」本来の意味が高校進学に狭くなりがちですが、人としての広い生き方と学びの在り方自体は、どこにいても、どうしていても変わるところはないと考えられるでしょう。

そんな十五歳を越えて、他郷で過ごし、紆余曲折、さまざまに歩んだ道がそれぞれに一通りではありえないことでしょう。そんな折節に、如何お過ごしでしょうかと、同級会開催の声がやさしくかかったりする。有り難く思う一瞬ですね。

さて、「十有五」歳の多感な頃に学んだあの東新中学校で、出会った先生方や友達同士が、お互いに影響を発散しあっていたことがありましたよね。そんな各学年、そんな各クラスの面々が、それぞれにさまざまな思い出や気持ちをもって何年間に一度くらい、より広く「母校同窓会」に集うことがあってもよいように思えてきます。

一人一人の卒業生にとってゆるく気さくにつきあえる同級会や同期会のバックになりながら、支えの一助となる「同窓会」もまた、望まれたりしているように思うからです。

立志の頃が実感できれば、またそこを新たにしてくれる。ふりかえれば今も恥ずかしいことが多いのですが、そんな稚拙な自分への思いを解きほぐしてくれそうな気がしてくるのです。